『近代京都と文化 ―「伝統」の再構築』

編・高木博志

思文閣出版 6000円＋税

千年の都の「不都合な真実」

京都はよく「千年の都」と呼ばれる。それがこの都市をもてはやす際の評語となっている。しかし、実際に平安遷都以来の歴史が、街に息づいているわけではない。由緒ありげな京都像の多くは、後世の都合で創作、あるいは増幅されてきた。

編者の高木博志は、その分析に努めてきた研究者である。とりわけ、近代以後のイメージ形成にこだわり、成果をあげてきた。これは、そんな高木が「伝統」の再構築と向き合い、まとめあげた共同研究の報告書である。

20世紀の中頃まで、京都は日本を代表する遊興都市であった。男たちは女を求めて入洛する。往時の京都観光には、そういう側面があった。

のみならず、京都を舞台とした文芸、絵画、映画は、この暗部をロマンチックにうたいあげている。たとえば、吉井勇（1886～1960）の歌やマキノ映画などが。

そんなところをあばきたてないでくれという人もなかにはおられよう。だが、「不都合な真実」と向き合うことも、歴史を知る醍醐味だと考える。

日本文化をたたえる語りも、しばしば京都の美化につながった。とりわけ、1930年代後半からの戦時体制下に、その傾向は強くなる。この論集も、日本主義の高揚とともに浮かび上がった京都の文化を、ひろい出している。

新村出（1876～1967）や寺田文章（1900～92）は、戦後の民主主義をリードした。そんな二人が、戦時の日本主義とともに扱われていることを意外に思われようか。目をそむけないでと言うしかない。

『雁の寺』（水上勉）を『古都』（川端康成）の裏面ととらえる見方は、おもしろい。

京都が女子師範の誘致で奈良に負けたことは知らなかった。京都の工芸と外国人観光客のかかわりは、今日にも続いている。除夜の鐘が1928年に発明された話では、驚かされた。

京都近代の逸事を知りたい人には、お薦めの一冊である。にがい読書が楽しめる。

（井上章一・国際日本文化研究センター所長）